○**タイトル**　『最寄りの正義』

○**著者名**　太田　純平

○**あらすじ（１３７文字）**

巡査長の黒沢修司（３４）は、もともと刑事課志望であった。しかし毎度のように書類審査で落とされ、万年、交番勤務である。今日も黒沢が腐りながら働いていると、ひょんなことから自動販売機の下に『ごめんなさい』とだけ書かれたメモ書きを見つける。子供の字だ。黒沢の勘が告げる。何か匂う。

○**特記事項**

社会人なら誰しも、一度は仕事で「腐った」経験があると思います。そんな腐った人間が、ちょっぴり前を向く。事件よりも人間らしさを描いた、交番物語です。

○**本編文字数**　３１５０文字

○登場人物表

黒沢　修司（３４）交番勤務の巡査長
西村　真弓（２６）新人巡査

美咲（５）
佳奈子（３５）美咲の母親
老人Ａ
老人Ｂ
老人Ｃ

○　交番・中

外から蝉の声。

巡査長の黒沢修司（３４）が団扇で扇いでいる。

新人巡査の西村真弓（２６）が勢いよく入って来る。

西村「黒沢さん！」

黒沢「あ？」

西村「スマホの落とし物です！」

黒沢「またか」

西村「今日は多いですね！」

黒沢「暑さでみんなヤラれてんだよ」

西村、落とし物を黒沢へ。

西村「いやぁ、昨日の台風が嘘みたいですね！　じゃ、巡回戻ります！」

西村、眩しそうに外へ。

黒沢、拾得物の台帳を出して、「ハァ」と深いタメ息。

○　コンビニ・表

買った弁当を手に黒沢が出て来る。

○　道

威勢の良い八百屋。

その前を通り過ぎる黒沢。

目の前の老人Ａが、自販機の前で小銭を落とす。自販機の下を覗こうとするが腰が悪くて屈めない。

黒沢「取りましょうか？」

老人Ａ「え？　ああ」

黒沢、屈み、自販機の下に手を伸ばす。

すると小銭とともに、メモ書きが。

『ごめんなさい』とだけ書いてある。

黒沢、小銭を取って、老人へ。

老人Ａ「ああ」

黒沢「それじゃ」

行こうとする黒沢。

ふっと気になって、足を止める。

○　交番・中

書類を書いている西村。
黒沢が外から戻って来る。
西村「お帰りなさい」
黒沢、西村の前に例のメモ書きを置く。
西村「？　なんですかこれ？」
黒沢「なんだと思う？」
西村「紙」
黒沢「（失笑）」
西村『ごめんなさい』？」
黒沢「自販機の下に落ちてたんだよ。すぐそこの道で」
西村「黒沢さん、自販機の下まで目光らせてるんすか？」
黒沢「別に。説明するのメンドイ」
西村「刑事の習性ってやつですか」
黒沢「あ？」
西村「だって黒沢さん、刑事になりたいんですもんね？」
黒沢「また書類で落ちたよ」
西村「そうなんすか？　黒沢さんでもなれな

いんだ」

黒沢「俺はコレ（ごますり）が出来ないから」

西村「お茶すか？」

黒沢「ゴマだよ」

西村「？」

黒沢、メモ書きを指して、

黒沢「それ、子供の字だろ？」

『ごめんなさい』の文字。

西村「（見て）言われてみれば」

黒沢「昨日の雨にも濡れてない。てことは今日落としたってことだ」

西村「おぉ、てことは！？」

黒沢「……ただのゴミだろ」

黒沢、弁当持って奥へ。

○　公園・外周

原付で巡回中の黒沢が、停車する。

ふと公園に目をやると、ベンチで泣いている少女を発見。

黒沢、ちょっと考え、原付から降りる。

○　同・中

　ベンチへ歩いていく黒沢。
　泣いている少女・美咲（５）。
黒沢「こんにちは」
美咲「（顔を上げる）」
黒沢「どうしたの？」
美咲「（頭を振る）」
黒沢「どうして泣いてるの？」
美咲「なんでもありません」
　黒沢、園内をざっと見渡して、
黒沢「お父さんお母さんは？」
美咲「（答えない）」
黒沢「ここにはいない？」
美咲「（うなずく）」
黒沢「そっかぁ。いやぁ、ここじゃあ暑いだろう。涼しいところ行かない？」
美咲「いきません」
黒沢「美味しい麦茶もあるよ。綺麗なお姉さんもいるし」

美咲「ほんとう？」
黒沢「ああ」

○　交番・中

書類を書いている西村。
黒沢と美咲が入って来る。
西村「お帰り……なさい」
黒沢「とりあえずお茶だして」
西村「ハイ」

黒沢、美咲を椅子に座らせる。
西村、麦茶を持って来て、美咲へ。
西村「ハイどうぞ」

美咲、麦茶に口をつけて、
美咲「ぬるい」
西村「ごめんね～氷がなくて」

黒沢、西村へ、
黒沢「とりあえず名前と住所」
西村「ハイ。（美咲へ）お名前なんですか？」
美咲「みさき」
西村「ミサキちゃんね」

美咲「（黒沢に）ねえねえ」

黒沢「ん？」

美咲「きれいなおねえさんは？」

黒沢「え？」

美咲「どこ？」

黒沢「（頭をぽりぽり掻く）」

美咲「あっ！」

美咲、メモ書きを見つけ、駆け寄る。

美咲「これ！　どこにあったの？」

黒沢「すぐそこのね、自動販売機の下だよ」

西村「もしかして美咲ちゃんの？」

美咲「うん。さがしてたの」

黒沢「それで泣いてたのか」

美咲「（うなずく）」

西村「（メモ指し）これ、どういう意味？」

美咲「（答えない）」

黒沢「喧嘩したか」

美咲「え？」

黒沢「喧嘩した人に謝りたいんだろう」

美咲「（うなずく）」

黒沢「お父さんか、お母さんか、それとも兄弟？」

美咲「おかあさん」

黒沢「怒られたのか」

美咲「（うなずく）」

黒沢「それで家を飛び出してきたんだな？」

美咲「（うなずく）」

黒沢「そっかぁ。とりあえず安心した」

西村、黒沢の袖を引っ張り、小声で、

西村「なんで分かったんです？」

黒沢「あ？」

西村「どうして喧嘩したって分かったんです？　それも家族と」

黒沢「普通はあんな紙探さなくても、家の中でまた新しい紙に書けばいいだろ？」

西村「確かに」

黒沢「だがそうしなかったってことは、家に帰れない事情があるってことだ。おおかた、両親に怒られたか、兄弟と喧嘩したか。あの紙はきっと、八百屋かどっかで紙とペン

を借りたんだろう」

西村「（感心したようにうなずく）」

黒沢、美咲の前でしゃがんで、

黒沢「さて。お家、帰ろうか？」

美咲「（頭を振る）」

黒沢「まだお母さんが怖いか」

美咲「（うなずく）」

黒沢「よし、じゃあお兄さんたちと一緒に謝ろうか」

美咲「いっしょに？」

黒沢「ああ、一緒に。お家の住所か電話番号は分かる？」

美咲「（頭を振る）」

黒沢「げ」

美咲「（思い出したように）あっ」

美咲、首からかかっていたケースを服の中から引っ張り出す。

ケースを開くと、家の鍵とともに、名前や住所、電話番号の書いたメモ書きが。

黒沢・西村「お～」

黒沢「ほら、やっぱりお母さんは、美咲ちゃんのことをちゃんと考えてるんだよ？　それはなんでか分かる？　美咲ちゃんのことが大好きだからだよ？」

美咲「（うなずく）」

黒沢、立ち上がり、西村へ、

黒沢「電話して。来てもらおう」

西村「ハイ」

西村、固定電話で電話を掛けようとする。

すると外から「美咲？」という声が。

美咲「あっ！」

外には美咲の母親・佳奈子（３５）が。

佳奈子「美咲！　アンタ何をやって……どうもすみませんウチの子が」

西村「あ、お母さん？　どうぞ」

佳奈子、入って、

佳奈子「美咲！　アンタ何やってんの！　もう！　どれだけ心配したと思ってんの！？」

美咲、黒沢の手をぎゅっと握る。

黒沢、『ごめんなさい』のメモ書きを取

って、

黒沢「（美咲に）じゃあせーので言おうか」

美咲「（うなずく）」

黒沢「せーの」

黒沢・美咲「ごめんなさい」

佳奈子「！」

　黒沢、メモ書きを佳奈子に渡して、

黒沢「美咲ちゃんが書いたんです、お母さんに渡そうと思ってたみたいで」

　『ごめんなさい』の文字。

佳奈子「（見て）……」

黒沢「だけどその紙を途中で失くしちゃって、公園のベンチにいたところを、私が」

佳奈子「どうもご迷惑をおかけしまして」

黒沢「いえ」

佳奈子「美咲……お母さんこそ悪かった。怒鳴ったりしてごめんね」

美咲「（うなずく）」

佳奈子「帰ろ？」

美咲「（うなずく）」

親子、手を繋ぎ、外へ。

佳奈子「どうもありがとうございました」

黒沢と西村、見送りに出て、

黒沢「お気をつけて」

西村「バイバイ美咲ちゃん」

美咲、手を振る。ようやく笑顔が。

黒沢と西村、背中を見送りながら、

西村「黒沢さんは立派な刑事ですよ」

黒沢「ハイハイ」

西村「どうすか書類。もう一度、署に送ってみたら――」

黒沢「送りゃあいいってもんじゃないんだよ。誰かの推薦が必要なんだ」

西村「じゃあ私が推薦します」

黒沢「お前になんの権限があるんだよ」

黒沢、中へ。

西村、後を追う。

黒沢「まぁ交番勤務も悪くはねえわな」

西村「え？」

黒沢「誰かの日常を、守ってやれるんだから」

西村「……ハイ」

老人Bが入って来て、

老人B「ごめんください。ちょっと道を訊きたいんだけどね」

西村「あーハイただいま」

老人Cが入って来て、

老人C「ちょっと落とし物をしちゃってね」

黒沢「あーどうぞこちらへ」

それぞれ対応する黒沢と西村。

市民の日常を守る、最寄りの正義だ。

（完）